

実践コミュニティの優れた設計の在り方 ー 考え、議論する道徳の研究を通して ー

大 野 隆 次 柘 植 良 雄
岐阜県羽島市立堀津小学校 岐阜聖徳学園大学教育学部

The establishment of a superior design for a practice community : Through moral research on thinking and discussing

Ryuji OHNO, Yoshio TSUGE

キーワード：コミュニティ・オブ・プラクティス 実践コミュニティ育成の7原則
考え、議論する道徳 授業展開

I. はじめに

1. 道徳教育の抜本的充実が求められる背景

今年度より、小学校は新学習指導要領が全面实施となった。今回の改訂は2030年頃の社会を見据え、さらにその先の豊かな社会を築くために活躍する子供たちを見通した「教育の役割」とは何かという視点から議論が進められた。21世紀は「知識基盤社会」である。情報の進化が経済や文化などのグローバル化を加速させる中で、一つの出来事が広範囲で複雑化し、先を見通すことが難しくなっている。そのために、新学習指導要領では子供たちが予測できない時代に、解き方の決まった問題を効率よく解くだけでなく、主体的に感性を働かせて、他者と協働しながらより豊かなものを創りあげていくことが期待されている。以下に述べた文書は、文部科学省初等中等教育局教育課程課の「道徳教育の抜本的充実に向け¹⁾」に述べられているものである。

この中で、小学校の道徳は前倒しで実施され、2018年度より「特別の教科 道徳」として全面实施された。道徳教育の抜本的充実が求められる背景として、以下の2点が挙げられている。

①深刻ないじめの本質的な問題に向き合う

②決まった正解のない予測困難な時代を生きる

つまり、自らの人生や社会における答えが定まっていない問いを受け止め、多様な他者と議論を重ね探究し、「納得解（自分も納得でき周囲も納得を得られる解）」を得るための資質・能力が求められている。こうした資質・能力の育成に向け、道徳教育の果たす役割は大きい。予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である。

2. 「特別の教科 道徳」とは

道徳は、学級担任が担当することが望ましいと考えられること、数値などによる評価は馴染まないと考えられることなど、各教科にない側面があるため、「特別の教科」という新たな枠組みを設け、位置付けることになった。具体的ポイントは以下の4つである。

①道徳科に検定教科書を導入

②内容について、いじめ問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものに改善

③問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れ、指導方法を工夫

④数値評価ではなく、児童生徒の道徳性に係る成長の様子を認め、励ます評価

道徳科の目標は、道徳性を養うために必要な学習の過程を明示し、以下のように改訂された。

〈道徳科の目標〉

道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、**道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習**を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。(太字は筆者による)

3. 「考え、議論する道徳」への質的転換に向けて

新学習指導要領では各教科の目標について、育成することを目指す資質・能力とそれらを育むために必要な教科等の特質に応じた学習過程が明示されている。資質・能力の三つの柱をバランスよく育んでいくためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が必要である。道徳科においては、「考え、議論する道徳」への転換を目指すことが道徳科の特質に応じた「主体的・対話的で深い学び」を実現することになる。

「自分ならどうするか」という観点から道徳的価値と向き合うとともに、自分とは異なる視点をもつ他者と議論することを通して、道徳的価値を多面的・多角的に考える。また、他者との合意形成や具体的な解決策を得ること自体が目的ではなく、多面的・多角的な思考を通して、道徳的価値を自分自身との関わりの中で深めていく。

Ⅱ. 研究内容の設定について

勤務校では、2017（平成 29）年度より道徳科の研究を行い、今年度 4 年目を迎える。筆者は現在、教務主任と研究主任を担っている。研究主任は教員生活で初めての経験となる。昨年度まで初任から 15 年連続、学級担任を務めてきたが、今年度からは学級担任を外れ、研究主任として学級担任をフォローしていく立場となった。そこで、筆者はこれまでの自身の経験や他の教員の授業を基にして、さらなる本校の道徳科の発展を遂げていきたいと考えている。

さて、現在、筆者は福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科²⁾に在籍している。この教職大学院の特徴は現職を離れず、学校が抱えている課題を研究テーマとして学べることである。そこで、本校が取り組んでいる道徳科に焦点を当て、よりよい道徳科の在り方を大学院での学びとした。ここでの学びにおいて、本校の研究を進めていく上で貴重な文献に出会うことができた。それは『コミュニティ・オブ・プラクティス』³⁾である。国内外の多くの企業のリーダーが企業経営、人材育成などを目的として本書を参考にして実践をしている。そこには、実践コミュニティ（あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な交流を通じて深めていく人々の集団）を育成するための方法が以下のように示されている。

【実践コミュニティ育成の 7 原則】（『コミュニティ・オブ・プラクティス』P. 91-110）

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1. 進化を前提とした設計を行う | 2. 内部と外部それぞれの視点を取り入れる |
| 3. さまざまなレベルの参加者を奨励する | 4. 公と私それぞれのコミュニティ空間を作る |
| 5. 価値に焦点を当てる | 6. 親近感と刺激とを組み合わせる |
| 7. コミュニティのリズムを生み出す | ※太字を研究対象とする |

本校の研究体制を一つの実践コミュニティと捉え、本校の研究の歩みを上記の「実践コミュニティ育成の 7 原則」に照らし合わせ、これまでの本校道徳科の実践を省察してみることにする。

Ⅲ. 研究内容

本校の研究を上記の「実践コミュニティ育成の 7 原則」のうち、次の 4 つの原則（1. 進化を前提とし

た設計を行う 2. 内部と外部それぞれの視点を取り入れる 3. さまざまなレベルの参加者を奨励する 5. 価値に焦点を当てる)を視点として省察した。そして、それぞれの視点による省察そのものを研究内容とした。

1. 進化を前提とした設計を行う……………道徳的価値への方向付け
2. さまざまなレベルの参加者を奨励する……………主体的に伝え合う工夫
3. 価値に焦点を当てる……………道徳的価値の把握
4. 内部と外部それぞれの視点を取り入れる……………授業後段の在り方の再検討

IV. 研究実践

1. 進化を前提とした設計を行う…道徳的価値への方向付け

著書『コミュニティ・オブ・プラクティス』には、「進化を前提とした設計を行う際に鍵となるのは、コミュニティの発展に触媒作用を及ぼすような方法で、設計要素を組み合わせること」とある。ここでは、道徳科の単位時間における導入の在り方について事例を紹介する。

(1) 事前アンケートを活用した価値への導入

日常の経験や事例と結び付けて、本時ねらう道徳的価値への方向付けを行う。そこで、本時の価値に関わる簡単な事前アンケートを行い、その結果を提示した(図1【6年教材⁴⁾「ロレンゾの友達」】より)。

アンケートの結果より、全体の傾向や価値に対する意識の低い児童を捉えることができた。事前アンケートは学年の実態に応じて、文章表記したりアンケート結果を数値化したりした。このことは価値に対する意識の低い児童の授業後の変容を確かめることにも繋がり、そうすることで本時に捉えたい価値への方向付けを行うことができた。

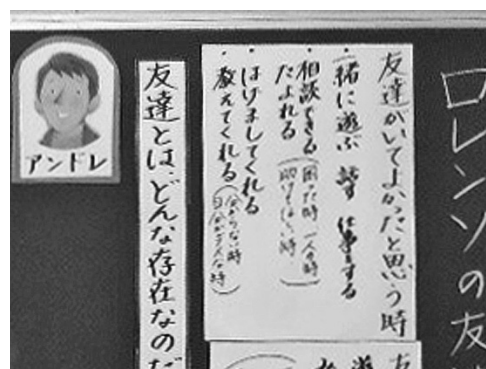


図1 導入時の事前アンケート

(2) 教材把握のための工夫

読み物教材を活用する場合は児童に教材の内容を確実に捉えさせる必要がある。これには教材にある挿絵を使うことが有効である。特に低学年はペープサートなどの絵話でどれだけ児童を引き込むかが重要である。できれば、児童が教材の文章を見なくても絵話で引き込めるぐらいがよい。そこで、ICTを生かし、教材の挿絵をデジタル化して大型テレビなどに映して提示した(図2【5年教材「わたしは飼育委員」】)。

教材の内容で「これぐらいの言葉の意味は分かっているだろう」と教師が思っている、児童は意外と理解していないことがある。そのため、児童にとって分かりにくそうな言葉は範読の時、教師がその都度分かりやすく説明を加えるようにした。



図2 ICTを活用した教材把握

【省察】研究内容1について

道徳的価値に関わる事前アンケート結果を提示することで、本時の授業の方向付けを行うことができた。また、授業後半で事前アンケート結果をもとに、意図的指名等で全ての児童の価値理解を確認できた。また、ICTや挿絵を効果的に活用したことで児童の教材把握に役立てることができた。今後も望ましい導入の在り方を探っていきたい。

2. さまざまなレベルの参加者を奨励する…主体的に伝え合う工夫

教師は本時のねらいを達成させるために発問を精選、吟味して授業に臨む。しかし、教師の発問に対して、よく発言をする子とそうでない子が見られ、児童の反応は様々である。ここで、教師が気を付けなければならないことは、よく発言する子だけで授業が進み、あたかも全員が理解していると錯覚することである。発言していない子の反応をしっかりと見極め、理解が図れているのかどうかを見届ける必要がある。『コミュニティ・オブ・プラクティス』では、コミュニティへの参加には通常、3つのレベル（「コアグループ」、「アクティブグループ」、「周辺グループ」）があると述べている（図3）。コミュニティの参加の質を高め、レベル間の適切な往き来を促す鍵は、どのレベルの参加者もフルメンバーのような気持ちになれるように、コミュニティの活動を設計することが必要だと述べている。

これを授業に当てはめてみることにする。コーディネーターは「教師」、コアグループは「よく発言する子」、周辺グループは「発言をしない子」ということになる。コミュニティ（ここでは授業）の質を高めるには、周辺グループ（発言をしない子）に焦点を当てるということになる。そこで、周辺グループにも、自分の考えを明確にもたせ、発言を促進させるための手立てとして、「心情円盤」「三角コーン」というツールを活用したり、役割演技を取り入れたりした。このことは、まさにこの具体であったと考える。

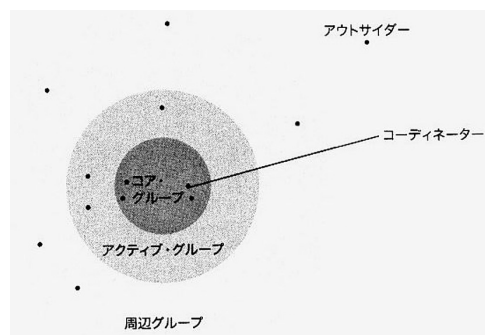


図3 コミュニティの参加の度合い

（1）心情円盤

「心情円盤」とは、色の違う2枚の紙を丸く切り、半径に切り込みを入れて交差させ、可動式の円グラフを作ったものである。これを使うことで、今の考えや気持ちを「割合」で表現できる。主に考えが2つに分かれる時に有効であり、自己理解・他者理解を深められるようにした。自分の考えをもつことは、「考え、議論する道徳」の「考え」に当たる部分である。確固たる自分の考えがないと、その後の「議論する」ことに繋がっていかない。そのために、だれもが自分の考えをはっきりと示すことができるようにした。また、授業の終末でも児童の変容を確かめる時に使用した。3年教材「道夫とぼく」での事例を示す（表1）。

表1 心情円盤を使った発表の様子

教師の発問	児童の反応
<ul style="list-style-type: none"> ・「ぼくもサッカーに入れてくれないかな。」と言われた「ぼく」は、どんな気持ちでしょう。 ・では、心情円盤を使って、「入れたくない」は青、「入れよう」はピンクにして、その理由も教えてください。 	<p>C1：どうしよう。 C2：入れようかな。</p> <p>C3：ぼくは青を多くしました。道夫さんは、サッカーは好きだけど、うまくないからです。</p> <p>C4：ぼくも青を多くしました。道夫さんは運動が苦手だから、試合に負けてしまうかもしれないからです。</p> <p>C5：私も青を多くしました。同じサッカーをしている子に笑われてしまうからです。</p>

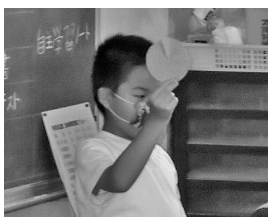


図4 心情円盤を片手に発言する児童

（２）三角コーン

「三角コーン」とは、三色の画用紙を三角錐にしたものである。色で自分の考えを表現できる。主に考えが３つに分かれる時に有効であり、自己理解・他者理解を深めるために役に立った。少人数で話し合う時も三角コーンを使うことによって、自分や相手の考えを自覚し、よりよい時間をもつことができるようになった。また、普段なかなか全体で発言できない子も少人数ということもあり、発言しやすくなった。何よりもお互いの考えを可視化することで、一目で分かるようになった。

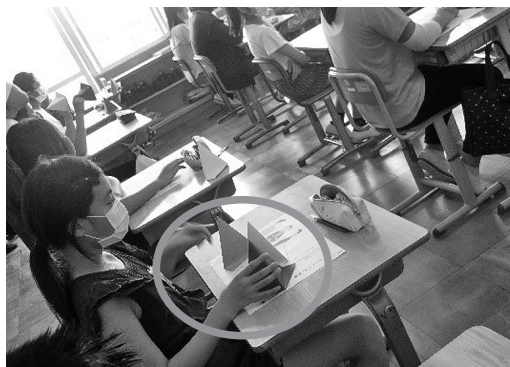


図５ 自分の意思を示す「三角コーン」



図６ 「三角コーン」をもとに少人数で話し合う様子

（３）役割演技による価値理解

役割演技は、ねらいに関わって多様な考え方や感じ方を表出して、他者理解を通して自分との関わりで人間理解や価値理解をするための手段である。語彙の少ない低学年にとっては有効である。役割演技ではペアで行う前に、まず教師と代表児童とで例示する。そうすることで、どうすればよいかが具体的に分かる。ペアで行う場合、一往復で終わってしまうことがあるが、多様な考え方や感じ方を出すために立場を一貫して演技を続けるようにした。３年教材「道夫とぼく」での事例を示す（表２）。

表２ 役割演技の様子（３年教材「道夫とぼく」より）

- T：「下手だから、誘わないのはどうかな。」と走太に言われた「ぼく（主人公）」はどんな気持ちでしょう。「走太」と「ぼく」になってやってみましょう。
- C1：「下手だから、誘わないのはどうかな。」
- C2：「笑われるのはいやだな。」
- C1：「でも、道夫を入れないのは、かわいそうだと思うけど。」
- C2：「試合に負けたくないし…。」
- C1：「でも、道夫は下手だけど、入れてあげるとうれしいと思うよ。」
- C2：「うん…。じゃあ、今度、誘ってみようかな。」



図７ 役割演技の様子

【省察】研究内容２について

「心情円盤」、「三角コーン」のツールを使うことで、自分の考え方や感じ方を明らかにすることができた。視覚的に一目で分かり、有効なツールとなった。発言できない児童も自分の考えを表出する手助けとなった。しかし、二者択一の考え方にすると、どちらかの意見しか言えなくなってしまうため、使い方は一考する余地がある。

役割演技では、一往復で終わることなく相手の話を聞いて聞き返すなど、多様な考え方や感じ方をもつことができた。

3. 価値に焦点を当てる…道徳的価値の把握

『コミュニティ・オブ・プラクティス』には、「価値をもたらすコミュニティを設計するために大切なことは、メンバーに価値をはっきりと言葉に表すよう絶えず働きかけることである」と述べられている。学習指導要領の改訂で、道徳科においては問題解決的な学習が指導方法の一つとしてクローズアップされている。答えが一つではない課題に子供たちが道徳的価値と向き合い、考え、議論する道徳教育への転換により児童の道徳性を育むことを意図したからであると考ええる。そこで、授業後段で日常の問題場面を考える応用問題を設定した。これを本校の研究の価値として焦点を当てることにした。ただし、8月の校内研修会以後においては、授業後段の在り方は道徳科の特質に向き合い、応用問題に取り組ませるのではなく、「自己を見つめる」活動に転換していくことにした。

(1) 授業後段の在り方

①通常学級

授業後段において、授業前段で学んだ価値に照らし日常場面における身近な問題（応用問題）は授業前段の内容よりハードルを高くし、多様な解決策とその気持ちを問うようにして、よりよい解決策を模索し、道徳性を養うことができるようにした（表3）。

表3 応用問題の事例

学年 教材	本時の価値	応用問題
第1学年 「なわとび カード」	正直、誠実 うそをついたりごまかしを したりしないで、素直に伸び 伸びと生活すること	あなたは給食の後、牛乳パックを開くことを忘れて流しに置きっ放しにしまいました。先生がみんなの前で「誰か開き忘れた人はいませんか。」と聞きました。あなたは どう しますか。
第3学年 「日曜日の 公園で」	相互理解、寛容 自分の考えや意見を相手に伝 えるとともに、相手のことを 理解し、自分と異なる意見も 大切にすること	係活動で、クイズを考えてみんなに参加してもらおうとしましたが、参加してくれない仲間がいました。とても腹が立ってきました。あなたなら どう しますか。
第6学年 「ロレンゾ の友達」	友情、信頼 友達と互いに信頼し、学び合 って友情を深め、異性につい ても理解しながら、人間関係 を築いていくこと	仲の良い友達が教室にあるペンを盗ったといううわさを聞きました。友達に確認したら、そのことを認めました。あなたは友達のために どう しますか。

子供たちは授業前段で捉えた価値に照らし合わせ、解決策とその理由をセットにして話すようにした。上記の6年生の教材では、「友達と一緒に持ち主に謝りにいきます。どうしてか」という発言があった。

②特別支援学級

本校では、知的障害の特別支援学級が1学級ある。3年生と6年生の児童がそれぞれ1名ずつ在籍している。児童の実態に合った教材教具を工夫し、道徳科が進められている。その一例を、指人形劇を使った「そらを とぶ にわとり」⁵⁾で示す。

本教材は、にわとりが多くの子供から無理だと言われ、飛ぶ練習をやめようと思うのだが、「空を自由に飛びたい」という目標を思い出し、あきらめずにがんばって練習するという内容である。そこで、表4にあるように体験的な活動を取り入れ、授業後段に今取り組んでいる「なわとび」に挑戦することにした。6年生児童は目標としていた30回を達成することができた。3年生児童は記録達成には至らなかったが、本時の価値である「自分でやろうと決めた目標に向かってやり抜く」という意欲のある姿が見られた。

表4 特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）P. 524

第3章 特別の教科 道徳

3 知的障害者である児童又は生徒に対する教育を行う特別支援学校において、内容の指導に当たっては、個々の児童又は生徒の知的障害の状態、生活年齢、学習状況及び経験等に応じて、適切に指導の重点を定め、指導内容を具体化し、**体験的な活動を取り入れるなどの工夫**を行うこと。

※太字は筆者による



図8 指人形劇による場面把握



図9 なわとびを取り入れた体験的活動

(2) 終末の教師の説話

児童の発達段階を踏まえた内容を教師の説話として行った。教師の体験談やことわざ、詩などを紹介したことは児童に道徳的価値を高める上で有効であった。



友だち
わたしより
わたしのことを
よく知っている
ときどき
わたしのことを
わたしより
一生懸命になる
その友だちの
わたしは友だち

図10 詩による教師の説話(6年教材「ロレンゾの友達」)

【省察】研究内容3について

授業後段の応用問題は、各学級の実態に応じて近すぎず遠すぎないもの考えた。しかし、教師は価値に照らした適当な応用問題を考えることに苦労した。また、応用問題は授業前段の内容とあまり変わっていないものもあり、二番煎じとなるものも見られた。特別支援学級における「なわとびの体験的活動」は、児童に道徳的価値を実感させる上で有効な手段となった。今後も道徳的価値に応じた体験的な活動を考えていく。

終末での教師の説話は、教師の体験談だけではなく、詩やことわざなどを取り入れ、本時指導したい道徳的価値を明確に理解させることに繋がった。

4. 内部と外部それぞれの視点を取り入れる…授業後段の在り方の再検討

『コミュニティ・オブ・プラクティス』には、「優れたコミュニティ設計を行うためには、知識を開発し世話する潜在能力がコミュニティにどれほどあるかを理解することが大切だ。そのために、部外者の視点を取り入れなくてはならない」と述べられている。校内だけの研究体制の視点で進めていくと、研

究がマンネリ化してしまうことがある。そこで、外部の方の視点を取り入れる必要性を感じ、8月28日、岐阜聖徳学園大学、非常勤講師の河合宣昌先生にお越しいただき、ご指導いただくことにした（図11、図12）。

これまでの本校の授業後段の在り方は、上記のように授業前段で学んだ価値を日常の問題場面に置き換えて、その解決策を児童に考えさせるようにしていた。しかし、研修会を開催することで、新学習指導要領の目標に合致した授業後段の在り方を見いだすことができた。



図11 河合先生のご指導の様子

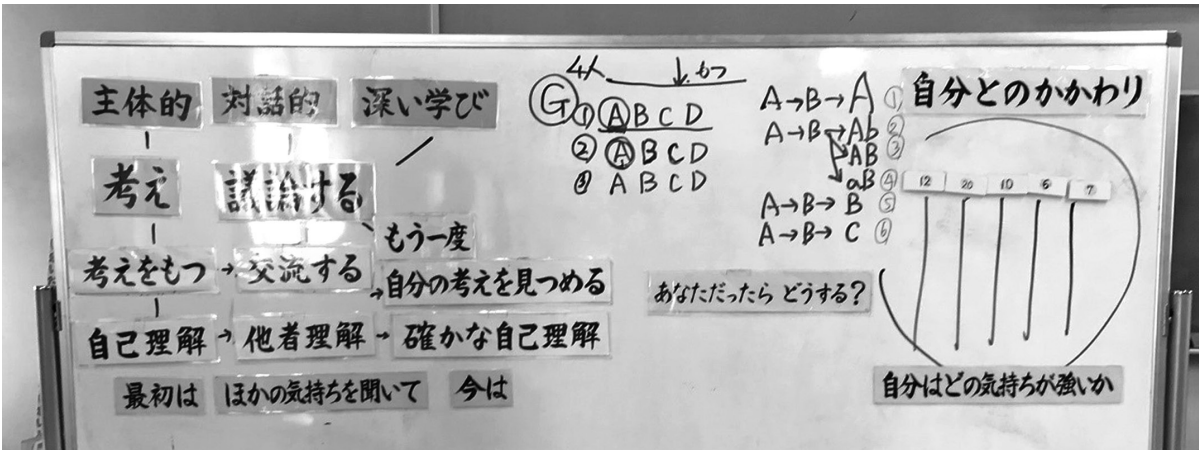


図12 他者理解を通した自己理解の在り方を示す板書

これまで本校が行ってきた応用問題は、児童に解決策を考えさせることになるために、「行為」を問うものになっており、道徳性を養うことになっていない。この過程では多様な解決策を交流するのではなく、把握した価値から自己を見つめるということである。つまり、これまでの自分の「過去」と「今」を見つめることであり、ここでできたことへの充実感・満足感や人としての弱さや課題を自覚させるのである。ここに力を入れなければ、よりよい道徳性を養うことはできない。そこで、以下のように見直しを図った。

(1) 授業後段における基本的な学習指導過程の見直し

ご指導を踏まえ、「授業後段における基本的な学習指導過程」を以下のように見直すことにした（図13）。

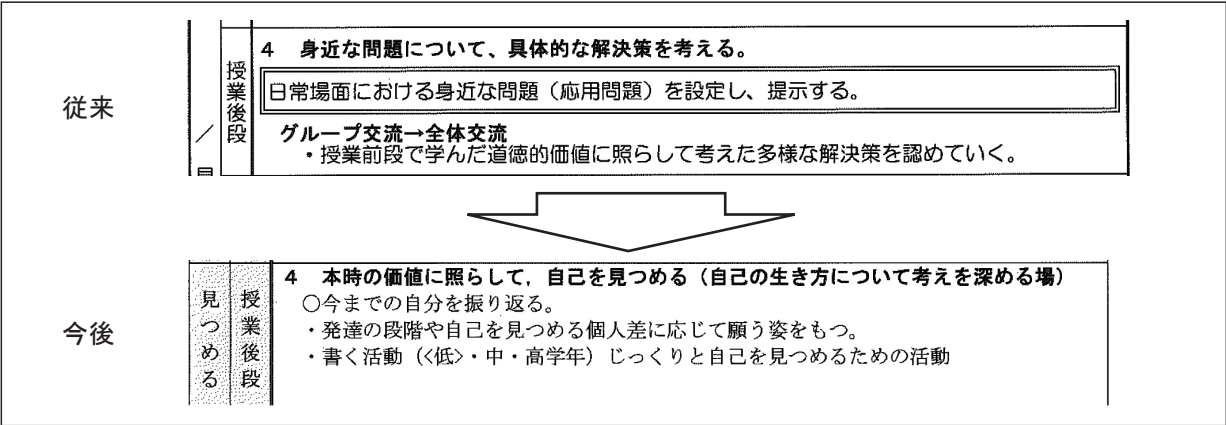


図13 授業後段における基本的な学習指導過程の見直し

（２）書く活動の位置付け

この過程では、じっくりと自己を見つめるために、「書く活動」を位置付ける。低学年の児童であっても、発達段階に応じて書かせていきたい。そこで、以下のような学習プリント（図 14）を活用し、自己を見つめていくようにする。




<p>【自己を見つめる学習プリント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習プリントに書き方の例を示す <ul style="list-style-type: none"> ①いつ ②どこで ③どんなことを ④その時の気持ち ⑤今、思うと ⑥これからの課題 ・各学年部でねらうこと <ul style="list-style-type: none"> 低学年…①～③（行為） 中学年…①～⑤（行為＋気持ち＋今思うこと） 高学年…①～⑥（行為＋気持ち＋今思うこと＋課題） 	<table border="1"> <tr> <td>道徳ノート</td> <td>（ ）年（ ）月 日</td> </tr> <tr> <td>（ ）番 名前（ ）</td> <td></td> </tr> <tr> <td>教材名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>書き方の例</td> <td></td> </tr> <tr> <td>①いつ ②どこで ③どんなことを</td> <td></td> </tr> <tr> <td>④その時の気持ち ⑤今、思うと ⑥これからの課題</td> <td></td> </tr> </table>	道徳ノート	（ ）年（ ）月 日	（ ）番 名前（ ）		教材名		書き方の例		①いつ ②どこで ③どんなことを		④その時の気持ち ⑤今、思うと ⑥これからの課題	
道徳ノート	（ ）年（ ）月 日												
（ ）番 名前（ ）													
教材名													
書き方の例													
①いつ ②どこで ③どんなことを													
④その時の気持ち ⑤今、思うと ⑥これからの課題													

図 14 授業後段における学習プリント

（３）本校の研究主題の見直し

これまで見てきたように授業後段では主として日常場面を扱う応用問題を取り扱っていた。そのため、研究主題、研究仮説の中に、「解決策」や「実効性」を求める文言が入っていた。道徳科の特質は道徳的価値の理解を基に、他者理解を図りながら自己を見つめることにある。その特質を踏まえ、本校の研究主題・研究仮説を以下のように見直していくことにする（表 5）。

表 5 見直しを図った本校の研究主題・研究仮説

<p>【研究主題】</p> <p>自分の思いや考えを意欲的に伝え合うことを通して、道徳性を育む道徳科の在り方 －考え、議論する道徳科の時間を通して－</p> <p>【研究仮説】</p> <p>主体的に伝え合う場や自己を見つめる場を設定した一単位時間の学習指導過程の在り方を考えれば、意欲的に自分の思いや考えを仲間と伝え合う中で、自己を見つめ児童一人一人の道徳性を育むことができる。</p>
--

【省察】研究内容 4 について

内部（校内研究）の視点だけでなく、外部（河合先生のご指導）の視点を取り入れることで、これまでの歩みを省みることができ、新たな方向性を見いだすことができた。今後も定期的に様々な外部の視点を取り入れ、道徳科の特質に照らし合わせて、進むべき方向が正しいかどうかを見極めながら実践を積み重ねていきたい。

V. 成果と課題

『コミュニティ・オブ・プラクティス』の「実践コミュニティ育成の 7 原則」の視点で、本校の研究と照らし合わせることで、その歩みが適切かどうかを確かめることができた。今回は実践コミュニティ育成の 7 原則のうち、4 つの原則を視点として省察した。今後、本校の研究をさらに進める中で残りの 3 原則からも省察したいと考える。

- ・「進化を前提とした設計をする」では、道徳的価値に関わる事前アンケート結果の提示や、ICT や挿絵を効果的に活用した教材提示は児童の実態に合った望ましい導入の在り方を考えることができた。
- ・「さまざまなレベルの参加者を奨励する」では、「心情円盤」、「三角コーン」のツールを使うことで、発言できない児童も自分の考えを表出する手助けとなり、お互いの考えを理解し合うことに繋がった。
- ・「価値に焦点を当てる」では、特別支援学級の「なわとびの体験的活動」は、児童に道徳的価値を実感させる有効な手段となった。終末での教師の説話は教師の体験談だけではなく、詩やことわざなどを取り入れることで、本時指導したい道徳的価値を明確にすることに繋がった。
- ・「内部と外部それぞれの視点を取り入れる」では、内部の視点だけでなく、外部の視点を取り入れることで、これまでの歩みを省みることができ、新たな方向性を見いだすことができた。道徳科の特質に合わせて、新学習指導要領の目標に合致した授業後段となるように見直すことができた。

VI 終わりに

令和2年度はコロナ禍での学校のスタートとなった。4月7日に入学式と始業式は迎えたものの、その後2か月間は臨時休業となった。今年度は、10月30日に羽島市教育委員会指定の実践公表会⁶⁾が予定されていたが、4月の時点では不確定であった（後日、新型コロナウイルス感染拡大により中止となった）。この間、実践はできなかったが、職員間で指導案審議を進めることとした。まず、これまでの研究の歩みを転入職員に理解してもらうことから始め、昨年度の授業映像を基に、本研究の内容や主張点を示した。次に、実践公表会があることを前提として、夏休み前までに全学級に授業公開の依頼をすることにした。学年部、全職員で指導案審議の後、事前研をして授業に臨んでもらった。そして、学校再開後の6月～7月にかけて、特別支援学級を含む全学級で授業公開をし、成果と課題を明らかにしてきた。特にこの時期は新型コロナウイルスに対する消毒作業、清掃作業を放課後に行っており、極めて多忙な日々であったが職員からの不平不満はなく研究を進めていただけた。そのことに感謝の思いでいっぱいである。来年度の実践公表会では、子供たちの姿を通して、本校の進める「考え、議論する道徳」の在り方を他校の先生方に理解してもらう機会となるようにしていきたい。

注・文献

- 1) 小学校・中学校道徳担当指導主事等連絡協議会（H29.7.12）：「行政説明資料」, 文部科学省初等中等教育局教育課程課「道徳教育の抜本的充実に向けて」。
- 2) 福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科は、学校の必要に即した課題を中心に、学校と大学院が長期にわたって省察と研究を重ね、実践的な協働研究を進める。「教職専門性開発コース」「ミドルリーダー養成コース」「学校改革マネジメントコース」の3つのコースがあり、筆者は「学校改革マネジメントコース」に所属している。原則として2年を修業年限とし、修了時に教職修士が与えられる。
- 3) エティエンヌ・ウインガー, リチャード・マクダーモット, ウィリアム・M・スナイダー, (2002.12)：「コミュニティ・オブ・プラクティス」野村恭彦 監修, 野中郁次郎 解説, 櫻井祐子 訳, 翔泳社。
- 4) 朝倉諭美子, 杉中康平, 田沼茂紀, 他25名 (2019.2検定済)：「道徳6 きみが いちばん ひかるとき」光村図書, 他学年も同様の教材を使用している。
- 5) ゆびにんぎょうシリーズ④：「そらを とぶ にわとり」, 東高産業。
- 6) 羽島市内の小学校の間で、5年に1回研究実践を発表する公開授業。